

「ヤルばらば老化」は幸せ？



「お前百まで、わしゃ九十九まで。ともに白髪が生えるまで」の共白髪。もとは、謡曲「高砂」の中にあり、作者は世阿弥だ。室町時代では、夫婦共に白髪になるほどの長生きは珍しく、さぞやめでたいことであつたのだろう。近代化の進んだ大正初期でも日本人の平均寿命は45歳に満たなかつたのである。

珍しかった共白髪

さて、100歳を超えるひとが6万人以上になった日本だが、85歳を過ぎると3人に1人が、90歳台では、

2人に1人は認知症だという。家族の負担は大きく深刻な社会問題である。その認知症のもっとも大きな危険因子は加齢である。長生きすることが問題になるとは、世阿弥は夢にも思わなかつただろう。

その加齢に伴って増えてくる認知症の中でも、約7割を占めるアルツハイマー病や、比較的稀なレビー小体型認知症などは変性疾患である。脳の中の特定の神経細胞群が、少しずつ変質し、ついには死滅して機能

を失っていく病気だ。アルツハイマー病では、アミロイドβやタウ蛋白が、レビー小体型ではレビー小体のごみのように細胞内にたまり、たまり過ぎてごみ屋敷のようになり、ついには神経細胞が次々とダメになっていくのである。

今年のノーベル医学生理賞を受賞する大隈良典教授の「オートファジー」の研究は、認知症治療に夢が

認知症、治る病気になる

広がる。オートファジーは、神経細胞の中でも起きているのだ。一生入れ替わりのない神経細胞では、このオートファジーの働きで細胞内のごみのような不要なタンパク質を分解しているのである。

やがて、がんとともに認知症も治る病気になるだろう。そして、ひとは老化ともおさらばして、もっと長生きする時代がくるかもしれない。それは、ひとの幸せにつながるものと思いたいが、先のことは誰にも分からない。

(石黒修三||いしぐるクリニック・脳神経外科専門医、金沢市在住)